

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

奈良市田原地区の矢田原町のネハンコは、コロナ感染症の流行で、この3年間、中断している。県教育委員会制作番組「大和路の文化財」の一環で子供と伝統行事が企画され、1993年3月20日に撮影に同行して矢田原を訪れたことがある。行事のトーヤ(ヤド)を前年務めた水野利一さんに、まず行事の概要をお聞きしてから、その年のトーヤ、山口伸幸氏宅を訪れた。矢田原は当時72戸。七つの垣内から成り立っていたが、三つの組農家組合に分かれ、それぞれでネハンコを行っていた。私が訪れたのは東上組、親王組、八反田垣内からなる第二組だった。参加するのは中学3年生以下の男女で、山口家は二十数年ぶりのト

トヤだった。午前10時半ごろには、山口家の玄関に数多くの靴が並んでいた。参加したのは男15人、女10人の計25人。一番年長の中学3年生が「イグイ」と呼ばれる。3年生は今年が3人いるが、2人は癩疹で欠席した。この25人に「ごちそうを振る舞う」トーヤは大変だった。今年のトーヤと親戚、昨年と来年的トーヤの3軒の女性たちが集まって、子供たちが喜びそうなウインナーや唐揚げ、肉団子やヨーグルト、さらに色ご飯など、ごちそうの用意に慌ただしかった。

一同が長テーブルに着く。イグイの前には、用意した特別の膳が一つ置いてある。膳の膳には、茶碗にアカメシ(赤飯)とシロメシ(白飯)が一膳ずつ。さらに「焼き物」として付いているのが、



奈良市矢田原で行われる「ネハンコ」の特別な膳
—2012年、志岐利恵子さん撮影

風変わりな次のものだった。この日までにイグイ以外の年長者は、タロ(タサノキ)の木の「キシッポ」(ヒガケ)を半分に分けて、その片方の内側を食紅で赤く塗って赤白の一組の箸を作る。また、タロの皮を剥いて、ひもにして、これに5円玉や50円玉を通したものをツゲの枝やキシッポのシッポに絡めて縛ってある。

「ごちそうが並び、一同がそろったところで、イグイが赤い箸で赤飯を、白い箸で白飯を一粒食べ始める。タロの箸にはツゲがあるの、「いたっ！」と声を上げています。この後、イグイが、わんの中の赤飯と白飯を天井に届くくらいに放り上げ、次の年長者が空の膳で受け止める。キシッポのシッポの中のお金は、苦勞して取り出してイグイがもらう。イグイになると、翌年からは、ネハンコには参加できない。子供の集まり、歓声が上がるところを念じたい。

近年、保存会として世話役を務める稲葉恭平さんは「昔は長男が生まれ、たか事を祝う派手な祝い事で、まるで結婚式のようだった」と話すが、来年こそは矢田原で、久しぶりにご飯を投げ上げて、歓声が上がるところを念じたい。

ご飯を投げるネハンコ

(奈良民俗文化研究所代)